歎異抄　第九章

一　念仏まふしさふらへども、踊躍歓喜のこゝろおろそかにさふらふこと、またいそぎ浄土へまひりたきこゝろのさふらはぬは、いかにとさふらうべきことにてさふらうやらんと、まふしいれてさふらひしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじこゝろにてありけり。よく〳〵案じみれば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよ〳〵往生は一定おもひたまふなり。よろこぶべきこゝろをおさへて、よろこばざるは煩悩の所為なり。しかるに、仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願はかくのごとし、われらがためなりけりとしられて、いよ〳〵たのもしくおぼゆるなり。また浄土へいそぎまひりたきこゝろのなくて、いさゝか所労のこともあれば、死なんずるやらんとこゝろぼそくおぼゆることも、煩悩の所為なり。久遠劫よりいまゝで流転せる苦悩の旧里はすてがたく、いまだむまれざる安養浄土はこひしからずさふらふこと、まことによく〳〵煩悩の興盛にさふらうにこそ。なごりおしくおもへども、娑婆の縁つきて、ちからなくしておはるときに、かの土へはまひるべきなり。いそぎまひりたきこゝろなきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそいよ〳〵大悲大願はたのもしく、往生は　決定と存じさふらへ。踊躍歓喜のこゝろもあり、いそぎ浄土へもまひりたくさふらはんには、煩悩のなきやらんとあしくさふらひなましと［云々］。

「念仏を申していましても、どうしたわけでしょうか、念仏すれば自然に生ずると言われる、踊りたくなるような、飛び跳ねたくなるような強い喜びの心がちっとも湧いてきません。また、楽しいはずの極楽浄土に早く行こうとする気もさっぱりございません。これは一体どうしたことでございましょうか」と、私が親鸞聖人に恐る恐るお尋ねしたところ、親鸞聖人は「実を言えば私も、自分の心にそういう疑問を感じていました。唯円房も同じ心でしたか」と言われ、次のようにお話になりました。

「あなたの第一の疑問ですが、よくよく考えてみますと、念仏すれば本来、天に踊り地に踊りたくな

るような喜びを感じるはずなのですが、私たちはそれを一向に喜びません。しかし、喜ばないからかえって私たちの極楽往生は間違いないと思うのです。喜ぶべきことを喜べないのは煩悩が原因です。阿弥陀如来は始めからそのような私たちの心にある煩悩をお見通しで、煩悩具足の凡夫とおっしゃり、この凡夫救済の願をお立てになったのですから、この他力の悲願はわれらのごとき凡夫のためであるということが分かりまして、いっそう阿弥陀如来のすくいが頼もしく思えるのです。また、早く浄土へ行こうという心が湧かず、ちょっと病気でもすると死ぬのではないかと不安に駆られることも煩悩ゆえの悩みです。遠い遠い昔から、生まれかわり死にかわりして流転してきた、苦しみに満ちたこの故郷が捨てかねて、まだ生まれたことのない安らかな浄土を恋しく思えない。それも、私たちの心に様々な煩悩が群がり興って盛んである証拠でもあります。この世に名残りは尽きないものの、この世の寿命が尽きて、どうしようもなく死んでしまわねばならぬときになって、やっとあの世へ行くのが凡夫の常であります。こういうふうにいつまでもこの世に恋々とした思いで、急いで浄土へ行こうとする心がない人間を、阿弥陀如来はとりわけ可哀そうに思われるのです。

こういうことを考えるにつけ、いよいよ阿弥陀如来の大きな慈悲、大いなる願いが頼もしく思われ、私たちはそういう凡夫ゆえ、極楽往生することは絶対に間違いないと思うのであります。もしも躍り上がり、飛び上がりたくなるような強い喜びが心にあったり、急いで浄土へ行きたいと思うような場合には、わたしたちの心に煩悩が無いのではないかと、かえって極楽往生のために都合が悪いと思われるのです」と。

【踊躍歓喜】身心全体で躍り上がって喜ぶこと。
【おろそかに】疎かに。いいかげんに。粗末に。
【いかにさふらうべきことにてさふらうやらん】一体どうしたことでございましょうか。
【唯円】本書の著者。
【一定】確かなこと。
【所為】しわざ。
【しろしめして】ご存知なされて。知るの敬語。
【凡夫】無知で愚かな人。聖者に対して言う。
【他力の悲願】慈悲にあふれた仏の願い。弥陀の本願のこと。悲願は慈悲の願いという意。
【所労】病気のこと。
【久遠劫】はかり知れないほど遠い遠い過去のこと。劫は数字で表せない時間の最大単位。
【流転】生まれかわり死にかわりして、人の迷い苦悩などが、絶え間なく移り変わってゆくこと。
【苦悩の旧里】苦しみや悩みの多いこの世は、懐かしい故郷であるということ。
【安養浄土】心を安らかに保ち、身を養う清浄な国土の意で、極楽浄土のこと。
【興盛】熾盛と同じ意で、強く勢いが盛んなこと。
【娑婆】いろいろの衆生が住んでいるところ、またいろいろな苦難に堪え忍んで生きなければならないところの意で、この世をいう。
【大悲大願】阿弥陀如来の大いなる慈悲の願い。弥陀の誓願をいう。
【あしく】悪い。